

構文化としての文法化

前田 満 (愛知学院大学)

1. 序

文法化 (grammaticalization) が話題となった 1990 年代以来、文法化のイメージは大きく様変わりし、現在では、その正体を構文化 (constructionalization) とする見解が広く受け入れられている。本発表でも、この流れを踏襲したうえで、近年の文法化のモデルをさらに精緻化することを目指した。とりわけ本発表が注目したのは、文法語 (grammatical word) がどのようにして生まれるのか、そして文法語がどのような役割を果たしているのか、という問題である。そして本発表の目的は、前田 (2025) において発表者が提案した独自の構文化モデルの観点からこれらの問題を解決することである。

2. 文法化のイメージの変遷

初期のモデルにおいて文法化は文法語の種となる語彙項目が単独で文法語へと発達するというイメージで語られた。だが、21 世紀に入ると、むしろ語彙項目を内包する構文こそが文法化の場として重要だとする認識が高まってきた。これは文法化の主体があくまでも構文であって文法語それ自体ではないとの見方で、その見方では、語彙項目の文法語への発達も文法化そのものではなく、構文内のマイナーな変化にすぎないということになる。そのため、本発表では、文法語の発達を「文法語化」と呼んで文法化と区別した。その後、Traugott and Trousdale (2013) は、構文化を「文法的構文化」(grammatical constructionalization) と「語彙的構文化」(lexical constructionalization) に分類し、前者を文法化として再定式化した。すなわち、「文法化=文法的構文化」という図式である。このモデルでは、文法的機能を担うのは文法語ではなく構文である。本発表もこの立場を踏襲している。

3. 構文化モデル

まず、構文化とは新規の構文が創発する通時的過程を指す。Bybee (2010) は、構文化の認知的基盤をチャンク形成 (chunking) とするが、これは使用頻度の高い語列をチャンク (chunk)、すなわち、ひと塊の処理ユニットへとまとめ上げる認知操作を指す。発表者の提案する構文化モデルでは、(a) 語彙項目 'A+B+C' からチャンク 'A=B=C' が形成され、すぐさま (b) 'A=B=C' が新規の項目として構文目録 (constructicon) に登録される。そして (c) チャンク 'A=B=C' が反復使用により強化されると、最終的に定着した構文 [A=B=C] が誕生する。次に、チャンクとしての全体的な処理モードが定着すると、チャンク 'A=B=C' はしだいに合成性 (compositionality) を失い始める。本発表では、合成性の縮減は発表者が「ゲシュタルト化」(gestaltization) と呼ぶ意味変化の結果として生ずると考える。ゲシュタルト化とは、個々の構成要素の意味を全体的意味 (holistic meaning) へとまとめあげ、構文的意味 (constructional meaning) を創出する過程である。本発表では、この過程を構成要素の意味が構文によって「吸収」され、それらが構文上で「混交」という形でモデル化する。一方、構文を構成する個々の語彙項目は、ゲシュタルト化を経て意味成分を「吸収」されていわば「意味の抜け殻」へと変化し、正常な記号としての機能を失う。この過程を「脱記号化」(designification) と呼ぶ。また、この過程を経て機能を失った語彙項目を「偽記号」(pseud-sign) と呼ぶ。典型的な偽記号の例としては、イディオム切片 (idiom chunk) や構文の固定語彙があげられる。(詳細については、前田 (2025: 152-164) を参照。)

4. 外適応としての文法語化

上記のとおり、Traugott and Trousdale は文法化を文法的構文化と再定式化し、その結果、文法機能は構文が担うものと考えられるに至った。そうになると、文法語の働きとは何かという疑問が生じる。本発表では、文法語は文法的構文の「構文標識」(constructional marker) としての機能を果たしていると主張した。構文標識とは、簡単に言うと、構文を特定の構文として視覚的に識別/同定するための標識である (Booij (2010))。例えば、be

gonna (be going to) 構文の ‘gonna’ は、文法的構文の構文標識であるため、同時に文法語でもある。本発表では、‘gonna’ のような文法語は、かつては語彙的項目であった要素が、脱記号化を経ていったんは偽記号となった後、構文標識として再機能化されたものと考えられる。Lass (1990) は、ひとたび機能を喪失した要素が別の機能へと再機能化される過程を「外適応」(exaptation) と呼ぶ。発表者の考えでは、文法語化も外適応の一例である。Lass の考えを上記の構文化モデルに当てはめると次のようになる。まず、Lass の言う「機能を失った要素」とは偽記号にあたる。そのため、外適応は「偽記号の新機能への充当」として再定式化できる。結局のところ、文法語化は「文法的構文内の偽記号化した固定語彙が構文標識へと再機能化される過程」として定式化できる。以上の想定により、かつて「文法化」と呼ばれていた現象は、構文全体の (i) 文法的構文化と (ii) 偽記号化した固定語彙の構文標識への再機能化という 2 つの並行した過程へと分解される。これを「2 層文法化モデル」と呼ぶ。

5. 文法語化と構造変化

文法語化の再機能化モデルを支持する根拠の 1 つとしては、文法的構文化の過程で生じられると思われる固定語彙どうしのセットフレーズ化がある。前田 (2016) によると、if only 祈願文 (if only optatives, e.g. If only you knew!) は、If only it were a bit shorter, it would be in style! のタイプの条件文から帰結節が脱落した結果、前件節だけが独立して誕生した構文だと考えられる。なお、if only 祈願文は、「祈願」という発話行為 (speech act) に特化した文法的構文の 1 つである。この構文では、文法的構文化の過程と並行して、‘if’ と ‘only’ が揃って脱記号化された後、両者がセットフレーズ化により一体化して発語内の力 (illocutionary force) を示す構文標識/文法語へと再機能化されたものと考えられる。このように考える根拠は主に 2 つある。最初の根拠は、‘if’ と ‘only’ が隣接する語順 (If only ...) の一般化である。前田 (2016) の調査によると、初期の if only 祈願文では、If you only knew the earnestness of Dora, aunt! (1850; C. Dickens, *David Copperfield*) のように、only が主語の右側に現れる語順しか見られない。‘if’ と ‘only’ が隣接する現在一般的な ‘If only ...’ 語順は 19 世紀の後半になってはじめて文献に現れ、19 世紀末に至ってようやく一般化する。この隣接語順の一般化は、[If NP only VP] ⇒ [[If=only] | NP VP] として記述できる ‘if’ と ‘only’ のセットフレーズ化の反映だと考えられる。もう 1 つの根拠は、複合名詞 ‘if-only(s)’ の存在である (e.g. There are so many if-onlys in my life.)。この複合名詞は ‘if’ と ‘only’ がまず単一語化 (univerbation) し、さらに、それが名詞へと転換 (conversion) されたものだと考えられる。そうだとすれば、‘if’ と ‘only’ は、転換の入力 (input) となる段階ですでにセットフレーズ化により単一の項目となっていたと考えることができる。この事実も、if only 祈願文では、‘if only’ の部分が後続する命題部分と構成素をなさず、[[If=only] | NP VP] のように、‘if only’ が談話標識 (discourse marker) に類似した遊離した構造となっている可能性が高いことを示している。これは固定スロットが構文標識へと再機能化されたことの類像的 (iconic) な構造的反映ではないかと考えられる。

4. 結論

本発表では、文法化を文法的構文化とする Traugott and Trousdale (2013) の見解を受け入れ、その立場に立って、さらに精緻な文法化モデルの構築を試みた。とりわけ、文法語の役割およびその創出過程に注目し、暫定的ではあるが、2 つの過程からなる文法化のモデル、すなわち、2 層文法化モデルを提案した。

参考文献: Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*, Oxford University Press, Oxford./Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge./前田満 (2016) 『史的構文研究—構文発達のダイナミズム—』博士論文、立正大学./前田満 (2025) 『構文発達のダイナミズム—構文化と構文変化—』開拓社、東京./Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.